

(一) 弥生文化の遺物とも称す可き鎮魂呪術芸能の現存について

長崎県五島列島の首都ともいべき福江市に、県の無形文化財に指定せられている、チャンココ踊りと称するものがある。この踊りの沿革について、一応五島民俗図誌（柳田國男監修、久保清・橋浦泰雄共著）より、逐一転載してみよう。

『念仏踊』通俗には、『チャンココ』と呼ばれている。現在行われている所は、福江の上大津・下大津・本山村・大浜村・富江町等である。服装は各町村とも多少ずつの相違はあるが、頭には陣笠又は花笠様のもの。但し夜念仏の時に於ては、編笠（筍の皮にて編みたるものにして、型極めて大いなるもの。）を冠り、腰にはビロ―乃至蒲の葉で作った腰蓑をつける。歌詞は「オモ―オモ―オンデイ・ヨニヤヒメヨ―デイ」と唱えるが、この歌詞並びに「チャンココ」と称する語義は不明であつて、未だ決定的な解釈は究められていないが、「チャンココ」は「治安孝行」の転訛であり、「オモ―オモ―オンデー・



「ヲニヤヒメヨデー」は「重御霊・同妙霊」の転訛であるとするもの、又後者を「思う思う御霊・同妙霊」であると解するもの、或は前者は鉦の音が、「チャンコンコン」と響くところから称えられるに至った児童語の一般化であり、後者の初句は、「御盆御礼」の転訛であろうとするもの等、各種の意見が出ている。

踊りの起源も亦明確でないが、主なる説は二つあって、その一つは舊藩主五島氏の祖宇久家盛が、文治三年七月十四日に、宇久島に来て、土人の既に行っていたこの念仏踊りを見たという、当時の従者、藤原久道筆の古記録があるから、この踊りの起源はそれより以前に行われていた念仏踊りの一種であるとする説と、その二は昔（時代不明）宇久東光寺の住職順堯という者が、御法度の妻帯をしたので、当時の領主（宇久氏）の怒りに觸れ、家臣大久保によって攻められた。順堯は緋の衣を着て、「大久保七代・殿八代」と叫んで自殺した。それ以後領主に崇禍が絶えないので、領主は順堯の亡霊を慰藉する爲に、此の念仏踊りを創始するに至ったという説とである。

さて、いっぽう、藤原兵衛氏稿の「盆念仏チャンココ踊りについて」より抜粋してみるとこうである。「古老の伝えるところによると、チャンココの本場は岐宿（福江島の中の岐宿町）を以て創始とし、次いで隣境各村に伝わるというが、さだかではない。このチャンココ団の員数は、福江にあつては、重鉦二人・小鉦（俗にイレコという。）四人・掛（踊子のことなり。大鼓を掛くるにより掛といひしならんか。）四十八人を以て定員とし、五十四名が一团となった。踊り日数は、盆の七日から十日までが夜念仏で、十一日から十五日までが晝念仏である。念仏打場順序としては、まず庄屋宅から藩主の御屋敷に赴いた。

御城内に至ると場所持ちと称して（俗にジャンジャンボーロという。）数十名の者が手に手に旗乃至小さな幟（のぼり）を持って（旗幟の上方先端には恰かもトウモロコシの立毛の如き糸房を着けおきたり。）大鉦の一打を合図に一斉に疾走し、庭内を数回廻つて止めた。ここにいる大鉦の一打というのは、チャンココ踊りに相和して用うる重鉦とは型も音も異つたところの「場所持ち」数名の所持する直径尺余の大きなカネであつて、音は「ジャングアン」と響く。疾走の時は大鉦を持った人がカネを乱打しながら先頭を切り、旗幟持ちがこれに続いて頗る美観を呈した。

疾走が終つて靜肅になると、庄屋の發する盆念仏なる号令によつて重鉦を一打し、それから鉦の音に合わせてチャンココの踊りが始まる。歌詞は前に記したとおりであるが、踊りの最中、時々祈るような姿態をして、「サーサーへ」という呪言を發する。

一団の服装は重鉦二名・小鉦四名・唱手若干名の者は上下を着け、掛は全部、新調の白地の筒袖襦袢を用い、腰蓑を纏い、脇差一本を手拵んで踊った。太鼓は昔は鹿革を用い、鼓型も亦大きいものであつた。足は素足で何も履かない。

右に記したとおりであるが、一読して感ずることは、この芸能の伝承が、正体模糊となつていくといふことである。「チャンココ」が「治安孝行」・「オモーオモーオンデー」・「オニヤヒメヨデー」が、「重御礼・同妙霊」くらいに受け取るに至つては、余りの幼稚さに微笑せずにはいられない。

わたくしは、この芸能が驚く可きことには、弥生文化の伝播役であつたことを、これから述べ、その証明を逐次列挙していこうとするものである。

日本に於ける稲の本家は長崎県五島列島福江島岐宿町、なかでもその川原郷であった。岐宿という所は、現在この文字を忠実に訓んで「キシク」などといわれているが、五島民俗図誌（以下五民）にも、「キシツ」と傍訓されている正しい呼称は、神代の昔からキシツである。古事記の天穗津・日本書紀の天穗日とあるのが、その紛れもない証據である。キとクとは音が通って同音であることは、言語学の初歩の常識であって、その「天」とは本居宣長翁も、「高天原をいう」と明快に説明している。現天皇家の祖神である天照大御神は、高天原にいて「吾が高天原の齋庭の稻穂を以ちて吾が子孫に任せ奉る」といわれた通りに、日本に初めて稲を持ち来ったところの、いかなれば弥生文化の將來者であった。

ところで、齋部広成の古語拾遺の末尾には、神代に大地主神が牛を屠殺して田人に振舞ったところ、御歳神の逆鱗に触れ、種々の償いをしてやつと許されたという経緯が記されている。その出来事のあるところは、ほかでもない、この岐宿町の中の川原郷である。川原郷の牛喰湾という所がそれである。地名というものは、神と人とそれらが住んでいる土地との因縁によってできたもの（諸國風土記はその例証）でもあるが故に、この牛喰湾という地名も、以後絶対に牛を殺して喰べるなどの不逞を働らきませぬ」という意志表示を、ここに刻印しているというわけである。この稲と相即不離の関係にあるのが、いま記したチャンココなのである。「五民」をのぞいてみると、さきにも述べておいたように、チャンココは岐宿に始まったという、と一応疑念を挟んだ書き振りであったが、まさに此所こそはその創始本場であった。但し、正しくは「ツアヌココ」であって、漢字を以てこれにあてるならば、「佐乃神講」ということになる。「佐」とは、サナエ・サオトメ・サミダレ・サツキ・サノボリ・サンバイなどのサであって、

その奈良時代以前に於ける正しい音はツア（岩波書店刊、日本文学大系万葉集一卷の序文より）であり、そのの意味するものは、祖靈であり（有精堂刊三谷栄一著、日本文学の民俗学的研究）且つ神靈である。（筑摩書店刊、稲の日本史）次の「乃」とは今日の「……ノ」に相当する。次の「神」は文字通り、神である。（コ）という言葉に何か米を意味するものがあつた。たもとこ・ほうしこ・そでのこなど稲の名がある。稲は他の穀物と異つてつまり神である。稲の日本史）いちばん終りの「講」とは、個人の信仰を乗り超えた、集団の信仰・集団の営む祭りをいう。（柳田民俗学より）つまり、「佐乃神講」とは、祖靈祭り・神稻祭りだということになり、また後の世にいうところの田の神祭りである。（稲の日本史の或る箇所）で、我國農業界の長老安藤広太郎博士が、奈良時代以前に於て、田の神という文字が見当らないようであるが、いったい、何と呼んでいたのであらうか？ と疑問を投げけている、その「田の神」の呼び名は、ツアヌコであつたわけである。今日にあつても、わが國の相撲界に於て、力士の所謂チャンコ鍋なる語源・語意が何であるか、不明のままになっているが、つまり正しくはツアヌコ鍋であり、従つて田の神鍋だということになるわけである。稲と祖靈とが如何なる理を以て同一義になっているのか？ ということは、極めて重大幽遠の意味があるのであろうが、未だ如何なる学者にもわかっていない。祖靈祭りという面から、後世盆念仏踊りだろうくらいに沙汰されるようになってはいるが、その然らざる理由の説明はいとも簡単である。その骨組みというものは、日本古神道に則つてできているのである故に。（ボロー口の疾走がこれである。髻烏羅は人にとっては招ぎ代であり、神にとっては憑り代であつた。）

これより、田の神の正体を浮き上らせてみよう。「五民」を繙いてみると、この佐乃神講團の服装に

関して、夜念佛に於ては笥の皮の編笠を冠ったとある。夜念仏なる呼び方も、じつは宵宮のことであつて、宵宮が本祭りであつた日本の神道からいうと、この宵宮の蓑笠姿が太古からの正式の服装つまり正装だったのである。(現時の花笠よりのものは、出雲国造神寿詞の中の天乃美迦微であり、日本書紀に出ている天乃御影であつて、いわゆる祖靈招魂用のものである。) オスイ・チハヤ姿以前の古い古い神の服装は、蓑笠姿であつた。尊い神であつたということを証するもの一つに、後撰集第一の歌がある。その中に藤原敏行朝臣の歌が、二元旦に二條のきさいの宮にて、白きおほうちきをたまわりて、と断り書きして、ふる雪の蓑代衣打ち着つつ春來にけりと驚かれぬる、とあるが、白田甚五郎博士がこの歌の註釈について、卓越した論文があるのでそれを拜借する。

“白い大桂を被つての感想であろうが、古今集に次ぐ榮ある第二代の勅撰和歌集の一番初めに据えられる程の、めでたさが一体何所に籠められているのであろうか？ 白い大桂を雪のかかつた蓑の代りの衣と見たてて、元日だから春來にけりと対象させたのであるが、それだけでは表面的である。これは蓑代着を着けたというところに重点がある。蓑代着を着けたとはいふものの、蓑を着けたと同じ気持ちになつて、春の到來に感慨を発しているのである。蓑を着て新年の春を告ぐる尊い訪れ人に変格した気持ちなのである”とある。

更に、五民にも、さまざまに通うなら蓑着け笠着け通わしやんせ、人に会うたなら、山芋掘りぢやといわしやんせ”という所謂、隠れ蓑的ニュアンスをもつた俗謡にも窺われるように、特権的片鱗が知られる。また、それを証する今も残る各地の民俗に関しては、三谷栄一博士がその著書(前記)に於て種々

集められている。さて、この岐宿を本據とした「佐乃神講」団が、弥生文化の伝播者、つまり稲作りの先生(稻の日本史の中で柳田國男翁は、こういつている。——稻の技術というものは、どうしても伝習しなければできない芸当ですからね。そうすると、どこかに早いところと、おそいところができるわけで、どうもわれわれは、どこかで初めて技術が生れて、朝鮮から日本に渡つて來て開けてしまつたとは考えられないのです。もう少し古いところに、どこかに稲作りの先生の巢があつたのではないか? ——その稲作の先生の巢が、ここであつた。)として、日本國中を遊行したことを述べよう。

「五民」によると、「佐乃神講」踊りの踊り手を踊り子などといわず、これを「掛」といふとある。太鼓を腹の辺りに掛けて掛けているから、「掛」というのだらうかと自問自答しているような按配であるのは、まことに淋しい。これはじつのところ、掛け踊りであつたのである。即ち、「嬉遊笑覧五下」なるものに、「打ち揃いて他所に行きて踊るを掛け踊りといふ」とあり、「眞澄遊覧記二十七」なるものには、秋田県南秋田郡某村所見の掛け踊りについて、踊りの連中が他村に入り込んだばあいに、「他郷に越えて來た、ひけとるな、節が揃わぬ御免なれ」と踊りを掛けると、入り込まれた村の踊り子達は、声を揃えて、にわか踊りを掛けられた。足が揃わぬ御免なれ」と唱い乍ら踊りを返したとある。続いて日次記事七月の条に、「十四日より晦日に至るまで、夜に入り大人小人行列して踊躍を催す。これを懸踊と謂う。その掛けらるるところの家、再び踊りを催して往いてこれに酬いる。是を返すと称す。云々、”とある。掛け踊りは鎮魂呪術芸能と大いに関係があり、従つて、もの争いの形式——水掛け祭りや、喧嘩祭り——になるのは当然のことである。

即ち、この佐乃神講団の掛け踊りは、いったい何が目的であったかというところ、稲種と稲魂とを分け與えて、稲に子どもを生ませるべく、日本國中に仕掛けて廻ったということにある。(稲は、これを單に高級な食料として珍重するのみでなく、これを増殖せしむ可き信仰が上代人にあった。——稲の日本史より。)とあるので、ここに「稲に子供を生ませるべく」という奇妙な言葉が出て來たので、上代人の稲作信仰に関し、簡單ながらも少し記す要がある。そこで、松本信広博士の次の話を拜借する。柳田先生が、産屋うぶやという講演をなさつて、わたくしどもが非常に驚かされたのは、新嘗祭というのは、新しく收穫された稲を嘗なめるから、新嘗だろうと單純に思つていたのですが、柳田先生の説に従うとそうじゃない、これは生れるという言葉を指す、「ニフ」という言葉がもとで、いったい稲は生きていますので、みごもつて子どもを生むというふうに見える。それで稲が收穫されて、それを山のように積んだ稲山のことを「ニフ」とか「ニホ」とかいう。それが稲の産屋にあたる。昔の人は稲魂をお祭りしてから倉に運んだのだ。「ニヒナメ」というのは、「ニフノアエ」、稲魂の誕生を祝う饗宴だ。「ニフノアエ」が約つづまって、「ニヒナメ」になつたという意見を出された。わたくしどもは初め非常に驚いて、半信半疑であつたわけでありませう。即ち、この述懐は、上代人の眼には人間以外の植物ですら、魂を持つた生きものであつたわけである。神道はこのような観点に根を發している。

そこで、いままでできた稲魂について、「佐乃神講」踊りから、ひき出してみよう。彼の踊り演技中に發する、「オーモンデー」と「オニヤヒメヨーデー」の呪言がこれである。初めの「オーモンデー」とは、「大物主神」のことである。大物主神は国土を天ツ神に献上後、この福江島に渡つて、余生を終つた。これに関して、あとで當然に觸れることであつて、そこで詳しく記すことにして、ともかく顯事あらことを一切退いて、幽事かみことを專管することになつた。掛け踊りである。この「佐乃神講」如きも、その幽事かみことの一部に属する。顯事あらことを退いた後の名は、大物主神であつた。「オーモン」とは「大物」であり、次なる「デー」は「ヂー」と同音で、その「遅」とは、尊称であつて、とりもなおさず、主神ぬしのかみである。この大物主神こそは、葦原の中ツ国を瑞穂の国に仕立てあげた大功労者であつた。ということは、稲に大いに子どもを生ませた、稲魂の分限者であつた。次に「オニヤヒメヨーデー」とは、これこそ純粹に稲魂である。稲の呼び名は、ナイ・イナ・ナ・ノ・ヌ等であるが、この中のナイの訓よみは、三重県射和の射和文庫に足利時代の寫本であるという、日本書紀の神代卷に、ナイとわざわざ振仮名があてられている。(稲の日本史より)そのナイの正しい音はニヤイであり、これに敬称のオを冠している。沖繩では神をウ神と呼ぶ、このウは本土のオに音韻が対応して同音である。稲は神であつたからオニヤイとなつた。次なるメは、その精靈をいう。水の精靈をミツハノメといい、鎮魂の精靈をオホムノメというが、つまりオニヤイメは、稲魂をいう。次なるデーはヂーであつて、稲魂様よということになる。総括していふならば、オーモンデーもオニヤヒメヨーデーも稲魂讚仰の呪言である。演技中、時々祈るような姿態をして、「サーサーへ」という呪言を發するが、これは「もろもろの祖靈へ」ということになる。この「サーサーへ」も、奈良時代以前に在つては、「ツアーツアーへ」であつたことになる。平安時代頃から變つたものであらう。さて、この演技の開始が、重鉦の一打を以てであることの背後には、甚深の幽理が沈められている。「五

民」の語るが如き大鉦と全然異つて、片手で吊り下げて鳴らすのである。即ち軽い鐘である。伝承の稀薄化につれ、このように重鉦の文字を以て表わされるようになったわけであつて、正しくは思金でなければならぬ。古事記の常世の思金立神をあらわしているのである。(本居翁はオモヒカネと訓んでいるが、わたくしは、この見方からオモフカネと訓むのが正しいと思う。)常世の意味には三通りあつて、まず一つには富と寿と恋愛の無何有郷の意・二つには死者の国の意・三つには、底世の意、そのソコヨとは隔き處の世、つまり隔絶僻遠の地などであつて、これらを合わせ兼ねたなかにも、特に常世の思金神という場合は、死者の国の思金神をいう。この島は高天原であるとともに、死者の行く可き仙島でもあつた。何故に死者はこの島に赴くものとせられたのか？ 簡単に言つと、上代人の天の鳥舟思想が淵源である。死者は鳥となつて、或いは鳥に運ばれて太陽のもとに到るものと信じられていた。この島には、天照大御神がいた。この神は大日露貴ともいわれる如く、日を祀る神であるとともに、日神即ち太陽神そのものであると信仰せられていたのである。死者は舟に乗せて海に流すと、この島に辿り着くものと信じて疑わなかつた。それが上代人の来世信仰であつた。その死者の国の宰領、還言すれば、死靈・祖靈崇社の統領は思金神であつたのである。かくてわかることは、このオモカネの一打で踊りが始まるというのは、常世の思金神の号令で鎮魂演技が開始されるということである。

およそ、子孫の田に降臨して稲の実りを豊かにしてくれるものは、祖靈であつた。その祖靈降臨役・祖靈分與役・祖靈増殖技術指導役等々の仕事だが、この佐乃神講の使命であつた。この「佐乃神講」団は何時頃、始まつたのであるか？ もう一つ言い換えるならば、この福江島には何時頃、日本に初めて

の稲が植えられたのであろうか？ 弥生時代の前期が紀元前三百年前後であるから、今より二千二百年前のことに属する。即ち、大國主神・少名毘古那神、それに「佐之神講」団の努力に因つて、二百年ばかりの間に、つまり二千年前頃までに、伊勢湾附近までの水稻農耕化が終り、又、更にその後、三百年ばかりの間に、青森附近までの農耕化が完成したのであつた。

だが、稲作知識の普及化と進歩につれて、次第に田の神、即ち稲作りの先生の御入来が不要になつてきた。佐乃神は田の神と呼ばれ、それがまた、單なるホカイ人たるの位置にまで成り下つてしまつたのであつた。かくて次第に忘れ去られ、遂には全く忘れられてしまった。自らも己れの島が弥生文化発祥の地であり、弥生文化の担い手であつたということを、すっかり忘れていたのである。だがしかし、古典を仔細に探究していくならば、この「佐乃神講」の活躍の足跡が、臆気ながらも透視できるといふものである。母が国・常世・ニライ・根の国、かく呼ばれる他郷からの、幸せをもたらす尊者客人の来訪の伝承は、この学問の窓を開かんとするものにとつて、限りのない撞憬を誘う。古代研究篇三巻を以て、われわれを啓蒙指導してくれる折口信夫博士も海の塩路の彼方の果てなる常世を求めようと、手をかざしてかく言うのであつた。

十年前、熊野に旅して、光り充つ眞晝の海に突き出た大王ヶ崎の盡端に立つた時、遙かな波路の果てに、わが魂のふるさとのあるような気がしてならなかつた。これをはかない詩人氣どりの感傷と卑下する気には、今以つてなれない。此は是れ、曾つては祖々の胸を煽り立てた懐郷心の間歌遺伝として、現われたものではなかつたか。

そこで、わたくしはわれわれ日本人の魂のふるさととは、いま述べた佐乃神講団の原発点が、正眞正銘の地であることを、記・紀の伝承を根拠として立證していくであろう。驚く可きことながら、記・紀神代の巻、つまり神話と称せられる出来事は、五島列島一連の島々に於ての出来事であったのである。

言い換えるならば、古い古い五島の日記帳が、記・紀神代の巻なのである。

つらつら思うに、太安万侶の古事記序文の一節に、然^{ルニ}上古之時、言意並^ニ朴^ニ敷^レ文^ヲ構^テ句^ヲ於^レ字^ニ即^チ難^シなる文章がある。この説明にみられるように、上代人の思念とその発表とは、全く素朴であったのである。とすれば、その素直なところの人々の伝承に虚偽・粉飾はないはずである。

そこで、わたくしはひとまず、五島列島最南端の福江島に、柳田國男翁の晩年の名作『海上の道』を読みながら、上陸してみることにする。「根の国の話」を開いてみると、こうある。

肥前の下五島、昔の世の大値賀島の北部海岸に、三井楽という岬と村がある。遠く万葉集以来の歌に出ているミミラクの崎と同じだと、今日の人は皆思っている。万葉集は巻一六に、歌が一首出ていて、そこに、「肥前国松浦県美禰良久崎」とあり、又続日本後紀の承和四年の記録にも、たぶん、この地のことだろうと思われる松浦郡の「早楽の崎」という地名がある。私の想像では、とにかく、この崎は夙^{はや}くから大陸に渡る船が、此處まで行き、もしくは向うから帰って来た船が、此處に船繋^{ふながか}りして、風潮の頃合を待つといった、海上の要衝として、注意せられていたのである。いっぽうにまた、ミミラクの島という歌は、それからずっと後の、幾つかの集の歌に出ていて、そのなかで一番有名なのは、源俊頼の散木奇譚集の中の「厄上らせ給いて後、みみらくの島のことを思い出でて

詠める」という詞書のある歌であるが、みみらくの我が日の本の島ならば、けふもみかげにあはましものを」というのは、この島に行けば、亡くなった人の顔を見ることができそうなという、そうした言い伝えがあったことを暗示している。

死者の行く可き仙島であることの伝承が、この散木奇譚集のでた頃まであったことの証になるわけであるが、この港を東へ出て、一つ岬を通り過ぎると、岐宿という町がある。陸路ならば白砂浜の婉々たる汀を過ぎて、打折^{うちわり}の岬^{（この辺りに石筒之男神及びその子建御雷之男神の住んでいた天ノ石屋がある。後述する。）}を暫く下って行くと、そこは岐宿町管内の川原郷で、さきに述べたように、牛屠殺禍の古語拾遺の伝承の地である。この島の首都ともいう可き福江市には、此處から二筋の道がある。バスで幾許^{いくばく}もかからない。この福江市には長崎港から三時間半で行けるフェリーがある。長崎空港からの空路を選ぶと二十五分である。此の島に、京ノ岳・翁頭山・鬼岳^{おんだけ}・岩谷岳^{いはや}・笹良岳^{なな}・七ノ岳^{なな}・父ヶ岳^{てや}・高山という山がある。これが古事記の本文に堂々と表われている。といったら、見る人我が目を疑い、聞く人我が耳を審^{いぶか}ることであろう。

ひとまず、古事記の本文をここに記してみよう。